明石の史跡（９６）新年の贈物

天文８年（１５３９）正月、明石与四郎（祐行）は、本願寺証如にたいし、太刀１腰と鵝目（眼＝ががん）を贈っている（「証如上人書札案」『石山本願寺日記下』５７頁）。

証如の返書に、嘉兆（めでたいきざし）という文字が見えるのは、当時の播磨の状況を勘案すれば、字句どおりに、すなおにはうけとれない。

前年（天文７）の１１月にはじまる、尼子詮久（あきひさ）の播磨侵攻は、在地に大きな衝撃を与えた。まず置塩山の守護赤松政村は、さしたる抵抗もせず、ひとまず高砂（梶原駿河守）に移動。各所の国人衆も個別に対応する。なかでも明石氏は御着の小寺氏とともに、尼子氏に通じて、高砂に出兵したために、赤松政村は、淡路に脱出という事態になり、播磨は混乱する。

年があけて、播磨の政情が、一時的に小康状態になったものの、４月８日、脱出先（郡家の田村能登守の館）より、細川持隆の後援を受けた守護赤松政村は、岩屋より渡海。人丸山（現在の明石城本丸跡）に布陣。明石与四郎（祐行）は、戦意を喪失して、降服という事態をむかえる（『兵庫県史３』２６９－７０頁』）。

このような狭間で、新年を迎えた明石氏は、「新年の贈り物」という行為にふみきったのである。贈り物の内容で興味を覚えるのは、「鵝目（眼）」がみえることである。文安３年（１４４６）、真言僧行誉（ぎょうよ）の編になる事典（壒嚢鈔＝あいのうしょう）によれば、鵝目（眼）とは「銭」のことで（「塵添じんてん壒嚢鈔」『大日本仏教全書』１５０．２５０頁）、数量的には不明とはいえ、それ相応の価値を読み取りたい。

当地方は、陸の大動脈（山陽道）と明石の津という良港をかかえ、人と物の流れの盛んなることは、十分に予測され、物流を媒介するものは、銭貨であり、上記の「新年の贈り物」とは、こうした状況を反映したものではなかろうか。

日本歴史学会会員　　茨木　一成